

## テーマセッション2

## 思春期の人をもつ家族への研究的アプローチ

ファシリテーター 工藤美子（兵庫県立大学看護学部）  
二宮啓子（神戸市看護大学）

思春期は、第二性徴に伴う身体の変化を経験し、自己のアイデンティティを模索し、親からの自立を図る小児期から成熟期への移行の時期です。その中で、受験勉強や友達・親との関係など思春期の人を取り巻く環境は思春期の人に多くのストレスを与えます。また、健康な人も疾病を有している人も思春期の人たちの健康問題は生活行動に由来することが多いことが示されています。そのため、思春期の人たちへの健康支援として、行動変容に焦点を当てることは重要な視点といえます。さらに、思春期の人がとる行動は親との関係性が関与していることも指摘されており、思春期の人だけを対象とするのではなく、家族を巻き込んだアプローチが効果的であると考えられます。しかし、親からの自立を果たそうとする思春期の人と親との関係性は複雑であり、思春期の行動に親との関係性が関与していることが示唆されていても、対象者に対して実際的なアプローチ方法を見出すことは困難な状況にあります。

ここでは、思春期の慢性疾患をもつ人と家族を対象者とした研究を題材とし、思春期の人と家族を対象者とした場合に各研究者が抱えている困難な点は何か、さらに研究により明らかになった成果を実践にどのように活用できるかについて検討し、思春期の人をもつ家族に対して今後どのような研究的アプローチが可能であるかを会場の皆様と共に考えていきたいと思っています。思春期の人々の看護に興味のある方は是非ご参加ください。

## 【検討する研究例】

研究の問い：

外来で思春期の糖尿病患児と親が話をしている場面で患児がいらいらしている様子を時々見かけることがあり、患児と親の療養生活に対する認識に相違があるのではないだろうか、患児の自立に合った親の養育態度なのだろうかと疑問に思った。

方法：

中学生・高校生の糖尿病患児とその親 30組を対象に、療養生活に対する患児と親の認識を把握するために二次元イメージ拡散法、患児の独立意識と親の養育態度に関する質問紙法、患児の療養生活に関する面接法を用いて調査を行った。

結果：

療養生活に対する親の大切さの認識は、患児の認識に比べ、血糖測定、食事の計量、規則正しい生活、勉強の4項目で有意に高かった。また、療養生活に対する親子の認識の相違は、患児の年齢と正の相関関係があった。そして、患児の独立性の意識が高いこと、親子の疾患管理行動の大切さ・実施の認識の相違が少ないこと、親の受容的子ども中心的関わりが少ないことが、よい血糖コントロールと関連があった。